若者よ！世界にでよう！ ドイツ日記

～その1：出国そして新生活スタート～

ドイツ連邦
物理工学研究所
山口敦史
Atsushi Yamaguchi

1 自己紹介

このたび通信ソサイエティマガジンにドイツでの研究生活の様子を執筆する機会を頂きました．ドイツへの留学を検討している方にはもちろん，全ての読者の方に一度はドイツに旅行してみたいと思って頂けるよう，ドイツの魅力を存分にお伝えしたいと思います．

私は2008年に京都大学で博士号を取得後，東京の情報通信研究機構（NICT）にポスドクとして3年間勤務しました．そして2011年6月から，フンボルト財団奨学生としてドイツ連邦物理工学研究所（PTB：Physikalisch-Technische Bundesanstalt）に所属を移し，2年間の予定で新たに研究を始めたところです．PTBは，時間・長さ・重さなど，様々な標準に関わる研究をしているドイツの国家機関です．私はその中の時間と周波数の標準に関する研究グループに所属し，次世代原子時計（超高精度な時間の標準）の開発を行っています．

2 なぜドイツか？

私は，お酒はビール派です．ビール大国のドイツに来た今，1日たっぷり研究をした後に，おいしいソーセージを食べながらドイツビールで一杯やるのは，まさに至福のひとときです．しかし，ビールとおいしいソーセージが理由で留学先をドイツに決めたわけではありません．

海外の研究室へは，研究者としての視野を広めるためにも，いつかは行きたいとずっと思っていました．そして2010年の夏頃，NICTでの研究が一段落したことから，年齢のことも考え，行くならば今しかないと留学する決心をしました．

ドイツに決めたのは，PTBで進められている画期的な次世代原子時計の開発に携わるためです．この次世代原子時計のアイデアは，PTBで2003年に発表されました．しかし，技術的に非常に難しく，いまだに実験に成功したグループはありません．とはいうものの，その将来性の高さから，今や世界中で10を超えるグループが実現を目指して激しい競争を繰り広げています．私はNICT時代にこのアイデアを知り，次の自分の研究テーマに決めました．そして，アイデア発祥の地であるPTBが，この研究のノウハウや知識の蓄積において他のグループより優っているだろうと考え，PTBを研究の場所として選びました．したがって，まず研究テーマを決め，研究機関を決め，それがドイツだった，というのがドイツに決まった経緯です．

3 フンボルト財団

行き先が決まると，次は「どのお金で行くか？」を考えなければなりません．私は三つの奨学金に応募し，最終的に一番条件の良かったフンボルト財団の奨学金を選びました．フンボルト財団は，ドイツ政府の支援を受け，主に海外からドイツに来て研究をしようとしている博士号取得者を支援しているドイツの団体です．1953年に創設されて以来，奨学生の数は25,000人を超え，44人のノーベル賞受賞者を輩出している由緒ある奨学金です．応募は一年中いつでも可能です．年に3回（3月，7月，11月）選考会があり，申し込んだ日付に一番近い選考会で合否が決められます．

給料は私の応募した奨学金の中では一番良く，また各種手当もとても充実しています．研究を始める前に，希望すれば数か月の集中ドイツ語研修を受けることができます．また，私のように夫婦で来ている研究者には，家族手当も出ます．その他，学会への出張交通費，健康保険の支払いも部分的ではありますが援助されます．

フンボルト財団が他の奨学金に比べて非常に優れていると私が感じるのは，「研究者が，いかに快適な研

© 電子情報通信学会 2011

究生活を送れるか」を徹底的に追求している点です．一年中いつでも応募できるというシステム一つとっても，博士号を取るタイミング，海外に行こうと思うタイミングは研究者それぞれでばらばらであるという事実を考慮し，誰もが応募しやすいように考えられており，フンボルト財団の配慮の行き届いたシステムの一端を感じて頂けるのではないでしょうか．奨学生の実に9割以上がドイツ滞在に満足して帰国する，という驚異的なアンケート結果も，充実したサポートの成果を数字で裏付けています．そしてこのように，外国から来る研究者を手厚く支援することが，長い目で見るとドイツにとって大きな利益になると考えているところに，ドイツの国としての大きな底力を感じます．

引越し準備 4

行き先が決まり，お金も決まり，いよいよ出発の準備です．市役所に海外転出届を出し，同時にドイツ滞在中の年金支払いの手続きをします．海外滞在中の年金は任意加入ですが，私たちはいずれ日本に戻る予定なので，加入しています．その他，電気・水道・ガスなどの解約をしますが，ほとんど全てインターネットで手続きできます．銀行の住所は，実家に変更しました．

ドイツは基本的に日本からビザを取得していく必要がありません．現地に到着後，外人局に行き，そこで住民登録すると滞在許可を発行してもらえる仕組みです．必要な書類は，ドイツ語訳付きの戸籍謄本，ドイツで有効な健康保険証，奨学金の合格証，顔写真などです．戸籍謄本の翻訳は，ドイツ大使館のHPで紹介されている公認翻訳者の方に依頼しました．ドイツ滞在中の健康保険は，フンボルト財団から幾つか会社を紹介して頂き，そのうちの一つに加入しています．サポートされる範囲によって値段が大きく違うため，選ぶ際にはじっくりカタログを読み込みました．

各種手続きと並行して，引越しの荷造りを進めます．ソファやダイニングテーブル，食器棚，冷蔵庫などの大物は，幸い友人・親戚に引き受けてもらうことができました．また，使い込んだ家電や不要になった家具などは，引越しの数週間前から市の粗大ごみ処理サービスに申し込み，少しずつ処理しました．

その他の荷物のうち，ドイツで必要なものは航空便

PTBの私の仕事場．

と船便に分けて送っています．航空便は1週間程度で届きますが値段が高く，船便は2か月かかりますが安くすみます．そこで，生活する上ですぐに必要な最低限のものは航空便（ダンボール1箱），それ以外は船便で送りました（ダンボール11箱）．日本に置いていく荷物は，私と妻の実家で半分ずつ預かってもらっています．それぞれダンボール10箱以上になる大量の荷物なのですが，他に置き場所がなくて困っていたので，本当に感謝しています．

引越荷物の箱詰めは，想像よりはるかに時間がかかり，引越し前日は徹夜でした．特に海外発送分は，どの箱に何が入っているのかを英語で書いたリストを用意しなければなりません．やめたいけれど，明日には家を出なければならないので絶対にやめられない，という追い込まれた状況で，朝には二人共疲労困憊してぐったりでした．荷物を送り出した後は，出国までの数日間を実家でゆっくり過ごし，これからしばらく日本を離れるということもあり，たっぷりと日本食を食べました．

さあ，いよいよ出国です．期待と不安の入り交じった複雑な思いを胸に，成田空港のチェックインカウンターへ．しかしそこで，思わぬことが待っていたのです．なんと飛行機の出発が4時間遅れているとのこと．出だしからいきなりつまずいてしまった感じです．結局，この遅れのため，途中のコペンハーゲンで一泊することを余儀なくされ，予定より一日遅れてドイツ入りすることになりました．しかし，このような予期せぬ出来事こそ旅の醍醐味，ということで，コペンハーゲンのホテルでは妻とビールで乾杯してゆっくり過ごしました．

新生活スタート

5

PTB のあるブラウンシュバイクは，ドイツ北部に位置する人口 25 万人の中規模の町です．緯度では日本の稚内よりも更に北に位置します．そのため夏は日がとても長く，午後 8 時を過ぎてやっと夕方という感じです．私たちが入国した 6 月は，気温 20℃前後で日も長く，1 年で一番過ごしやすい時期だそうです．逆に冬は気温が－10℃以下になり，更に日もずっと短くなるようで，どうなるのか今から心配です．

ドイツに入国して，まずやるべきことは外人局での滞在許可申請です．最初，妻と二人で外人局に行ったのですが，英語が全く通じず何も手続きできずにとぼとぼと帰ってきました．後から分かったのですが，基本的にまず予約が必要で，部屋も全然違うところでした．外人局なのだから英語が通じてもよいのではないかと思う一方，ドイツに来たのだからこちらがドイツ語を準備していくべきだったかとも思い，複雑な心境でした．結局，PTB の同僚に予約をとってもらい，当日には一緒についてきてもらって，無事滞在許可を取得することができました．

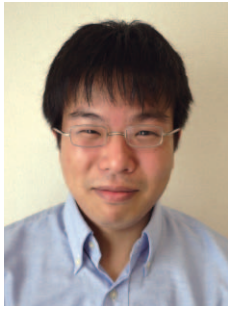
次は，家探しです．最初の 1 か月は PTB のゲストハウスに滞在し，その間に住む場所を探しました．家探しはインターネットを使います．良さそうな物件を見つけたら，連絡をとって見学に行き，気に入ったら契約をする，という仕組みです．私たちは 2 年間という短い期間なので，家具などがすべてそろった部屋を選びました．幸いだったのは，希望した部屋に前に住んでいた方が，英語を話せるとても親切な方だったことです．私たちが見学に行って気に入ったと言ったら，「不動産屋まではちょっと遠いから」ということでわざわざ車で送って下さいました．その上帰りには私たちを PTB まで送って下さり，本当に助かりました．ゲストハウスから新しい家への引越しは，荷物が少ないこともあり，スーツケースで運ぶだけで済みました．滞在許可をもらい，新しい家にも引っ越し，これでようやくドイツでの新生活スタートです．

ブラウンシュバイクのシンボル「ライオンの像」．

これから

6

日本を出国する前，海外で生活を始める上で大事なこととして，ある先生から「文化の違いに遭遇したときに，それが文化の違いだと認識できるように，心の準備をしておくこと」と教えて頂きました．このアドバイスのおかげで，ドイツに留学するという人生における大きな冒険の中でも，比較的冷静に物事に対処できていると思います．更にはその文化の違いをじっくり考えていくうちに，「そういう考え方，発想の仕方もあるのか」と新しい発見をすることもしばしばです．これから数回にわたり，そのような新しい発見も交えて，私の目から見たドイツという世界の中身をお伝えしていきたいと思います．



山口敦史

2003 京大・理卒．2008 同大学大学院理学研究科博士課程修了．2008 ～ 11 独立行政法人 情報通信研究機構 有期研究員．2011 からフンボルト財団奨学生として Physikalisch-Technische Bundesanstalt に留学中．原子のレーザ冷却，冷却原子を使った時間・周波数標準に関する研究に従事．博士（理学）．